

「大人」な自分のライフヒストリー

引越しの多かった幼少期

私の家はいわゆる転勤族で、幼稚園のときに二回、小学校のときに三回引越しを経験した。生まれは名古屋、幼少期に横浜・千葉、小学校に上がって岐阜、小学二年生にまた名古屋、三年生の秋に静岡、五年生に三度名古屋と、友達に話すと驚かれるような経歴を持っている。五年生のときに名古屋に戻ってきてからは父の転勤がなくなったこともあり、一度も引越しをしていない。

中学・高校と名古屋市内に通い、このまま愛知県から出ることはないと思っていたが、大学受験を終えてみれば、三重に通学していた。引越しの多かった幼少期が私にもたらしたものの一つは、友達との会話や面接で使える「ネタ」であると思う。

高校の友人に言われた「なんでそんなに大人なの」

引越しを繰り返せば、否が応でも環境適応能力が身につく。幼少期に仲良くなつては別れ、仲良くなつては別れを繰り返していた私はいつの間にか、「早く、浅い」人間関係を築く方法を手につけていた。友人に愚痴や不満を漏らさない私は、周囲の人間に嫌われない自信はあるが、同時に慕われている自信がない。友人に自ら何かを持ちかけることはほとんどない。自

分から遊びに誘うことはなく、誘われたら喜んで応じるというのが幼少期から現在まで貫いている友人との付き合い方である。

高校生のときに友達によく言われたのが、「いつも冷静ですごく大人っぽい」、「精神年齢が実年齢よりだいぶ上だよ」という言葉である。確かに、おしゃれもしないし流行にもうとい私は、今どきの女の子としては色々なものが欠けていると思う。しかし友人は、私が「あまり感情的にならない」、「他人の悪口を言わない」ことを挙げ、私を「大人」と評していた。一度だけ言われたのが、「なんでそんなに大人なの」という言葉である。そのときは「そんなこと言われても」と正直思った。

母親に言われた「可愛くない性格」

友人に「大人」と評されることは、複雑な感情もあったが嫌ではなかった。むしろ高校生特有のちよつと背伸びしたい感情もあり、ちよつと誇らしくもあった。友人に評価されたから、意識して「大人」を演じていたとは思いたくないが、「感情的にならず、冷静・公平な目で物事を見る」という私の信条はこの頃に形成されたものだと思う。そんな高校生であった私に、母がこんな言葉を投げかけた。

「なんでそんなに冷めてるの、可愛くない性格」

私の母は感情表現の激しい人で、よく言えば陽気で明るい、悪く言えば子供の私よりもよつぽど子供っぽい人である。そんな母は、職場で嫌なことがあったり、父とケンカをしたりするとよ

く私に愚痴を言いにくる。その母に私は、「冷静に」対応し、「公平な視点で」意見を言う。そんなときに母が言ったのが前述の言葉である。

その言葉を聞いたとき私は、「そうか、へ大人へって言われるってことは、子供っぽくなくて、「可愛くない」ってことなんだ」と目くらうろこの気分だった。

バイト先の上司に言われた「若奥様かと思ってた」

母にそんなことを言われたものだから、それからの私は、「大人」という評価には少しだけ敏感になっていた。今まで友人から「いつも落ち着いてて大人っぽい」と言われていたのは、「ノリが悪くて面白くない」と、遠回しに言われていたのかもしれない。しかし、いつの間にか形成されている性格は矯正できるものではない。大学生になりバイトを始めた私は、はじめて身内でも教師でもない大人と関わっていくわけだが、引越しを繰り返した者特有の、人当たりの良さで愛想よく振る舞えていたと思う。しかし、また私は同じ評価を受けてしまう。

そんなに頻繁にシフトに入っていたわけではないのだが、同じデパートの催事場で期間限定のバイトとして働いて2年ほどが経った大学三年生の秋ごろ、「就活が忙しくなりあまり来れなくなる」と言った私に、派遣元の社員さんがこう言った。

「とっても落ち着いた感じだから、若奥様のグループだと勝手に思ってたわ」

そのとき私は、「また言われた」と思うと同時に、「それって大

学生には見えないくらい老けて見えるってこと」とショックを受けた。

面接官に言われた「年齢の割に落ち着いていますね」

就職活動がはじまり、面接カードに記入するために自分を見つめなおす必要が出てきたが、大学生にもなつて、「落ち着いて大人っぽいこと」が長所だとは思えなかつたので、「長所」や「自己PR」の欄には、「転校を繰り返したことでコミュニケーション能力が身につくとき、誰とでも友好関係を築ける」や、「計画的に物事を進める」といった言葉を並べていた。

そして迎えたある企業の事務員の一次面接、ちなみにこちらが六人、面接官が三人の集団面接だった。一通り自己PRと志望動機を言い終え、一人ずつの質疑応答に差しかかった。私の番がきて、ひとつふたつと質問に答え終えたとき、面接官のうちの一人が私にこう言った。

「年齢の割に落ち着いていますね」

突然そう言われ、「友人にもよく言われます」としか返せなかつた。今までは友人だったり数年お世話になったバイト先の人だったりと、ある程度面識のある人たちだったが、今回は顔を合わせて三〇分もたつていない、数分間しか言葉を交わしていない人に言われてしまった。何よりも、性格の話に移ったわけでもなく、なんの前振りもなしに、世間話の途中というわけでもなく、面接という場で言われたことに驚いた。と同時に、「これはもう決定的だ」と思った。何がそう思わせただろうか。やっぱり地

味なメイクだろうか、話し方や表情だろうか、と、一瞬でいろいろなことを考えた。続けて「こうも言われた。」

「あまり緊張してないように見えるね」

先ほど言われた言葉だけでもたくさんのことを考えたのに、今度は昔母に言われた、というよりも今もよく言われる、「可愛げがない」という言葉が頭をよぎった。即座に私の中では、

「落ち着いて見える」大学生特有の初々しさが無い

「緊張して見えないように見える」熱意を感じない

という式ができ上がった。その場では、「とても緊張していません」と返し、そのまま何事もなかったかのように面接を終えたが、面接の場で、「緊張して見えないように見える」と言われるのは、とても評価されているとは思えなかった。結果的に、その言葉を言われた一次面接は受かっていて、その後受けた二次面接では落ちたので、「落ち着いていて、あまり緊張していない」自分が評価されたのかどうかは、わからずじまいである。

同じ境遇を持った面接指導の先生との出会い

あのとき面接で言われた言葉は褒め言葉だったのか、それとも…と葛藤しつつも、先に控える他の志望先の面接に備え、大学の面接担当の先生に指導をお願いした。いつも通り、自己PRの項目で、「引越しを繰り返したことでコミュニケーション能力が…」と述べ、練習を終えたところで先生が、「僕も転勤族で子供のころに引越しを繰り返した」という話をした。そのような境遇の人と会ったのは初めてだったので、とても驚くと同時に

なんだか嬉しくなった。その先生は「こうも言った。」

「小さい頃に引越しを繰り返すと、良くも悪くも当たり障りのない人間関係を築くのが上手になる。あなたもそうじゃない？」

この言葉には本当に衝撃を受けた。小さい頃から貫いてきた、というよりも、意図せず繰り返してきた私の人間関係に対するスタンスが、初対面で少し会話をしただけの人に見抜かれただけでなく、自分もそうであると。しかも、それは幼い頃に繰り返した引越しが影響していると。私は思わず、「そうです」と、同意してしまった。

もちろん、引越しをしたことが全てではないとわかっているが、育った環境が性格の形成に与える影響は大きいと思っている。加えて、同じ経験をした人が同じような考えを持っているとわかったことで、「答え」を見つけた気がした。

これからもたぶん「大人」な私

ここまでは、ライフヒストリーとして私が周囲に受けた評価について書き続けたが、私は友人に「大人」と評価され、初対面の人に「年齢の割に落ちついてる」と評価される自分が嫌いなわけではない。母に「可愛げがない」と言われたり、面接の席でわざわざ言われたりしたことから、考え込んだことはあったが、物心ついた頃からこんな感じだった気さえするので、これからどれだけ意識しても、たぶんこのままなのだと、悩まないことにした。

それに、「大人っぽい」といったって、春にはもう「大人」でなければ

ばならない社会人であるし、「精神年齢がだいぶ上」と言われようが身体がそのうち追いついてくる。

引越しを多くしたことで貴重な経験がたくさんできたと思っ
ているし、各地に友達がいる(と、言っても中部地方と関東の
一部だが)というのはちよつとした自慢である。春からは社会人
になり新しい環境に身を置くが、幼少期に培った環境適応能力
で早く職場に溶け込んで、職場の人たちと良好な人間関係を
築きたい。